

# 女性の社会進出に関する一考察

2013年 加藤 正史

日本の理系分野では（特に電気電子分野では）女性の割合が少ない [1]。そして社会においてもその割合に応じて女性の活躍はあまり目立たない。

過去にはどの国でも男性が仕事をし、女性が家事をする分業が成り立っていた。しかし、多くの国、特に先進国、で女性が社会に進出する割合は増えてきた。その一方、日本はその割合の伸びは低く、それが経済成長を停滞させているという議論もある。ここでは、その原因と今後どうなるかを考察してみる。

## 1. そもそも男性と女性は違うのか？女性は仕事に適しているのか？

- 出産という点で違う。また性格・体力も違う。
- 知的能力？という点では違わないと言われている [2]。ただし一発勝負の試験等では不利だという話もある。
- 仕事に適すという点ではどちらの性も得手不得手がある。また消費者の半分は女性であるため、少なくとも BtoC の企画において女性は重要である。

## 2. 日本の女性の社会進出が少ない理由

- 女性が少なくても高度経済成長できてしまったこと [3]
- 性別の異なる子供に対する親族の教育熱心さの不平等 [3]
- 高い地位の女性の少なさによるネガティブフィードバック [4]
- 保育施設の欠如 [5]

## 3. どうなっていくべきか

多くの女性が社会進出をするには多様性の容認（例えば、男性の育休、男性の主夫、転職）と保育施設が必要だと思われる。ただし多様性の容認や保育施設にはコストがかかる（例：育休可能な組織＝代替人材採用コストの発生）。コストを上回るベネフィットを見いだせるかであるが、少なくとも教育や行政の分野ではベネフィットがあると思われる。

最後に文献[3]の一節を引用する。“Change in Japan will mainly be produced by the economic necessity for employers to hire and keep good workers. In the decades ahead, more and more of these workers will be women. Perhaps a different miracle will eventually occur.” このように「経済的な必要性が日本を変えてまた違った奇跡が訪れるかもしれない」ということが 1993 年に述べられている。それから 20 年経過し、日本の社会はどう変わっただろうか。

## 参考文献

[1] [Homma et al. Science 340 \(2013\) 428](#)

[2] [Jonathan M. Kane and Janet E. Mertz, Notice of the AMS 59 \(2012\) 10](#)

[3] [Women and the Economic Miracle: Gender and Work in Postwar Japan, Mary C. Brinton, University California Press \(1993\)](#)

[4] [Homma et al., Genes to Cells 18 \(2013\) 529.](#)

[5] [G. H. Y. Lee, Monash University Dept. of Economics Discussion Paper 36/13](#)